金魚の声、

芹乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
金魚の声、

【Ｎコード】
Ｎ６３４６Ｑ

【作者名】
芹乃

【あらすじ】
どうにも不器用な姉妹のおはなし、ときどきそれ以外。

＊

昔に迷った様な気分にさせる店である。

白熱灯の淡い光が、店内にゆったりと広がっている。蜜柑色にも檸檬色にも見える小さく暖かな光。ちぐはぐ、寄せ集め、ごちゃ混ぜ、そんな言葉が似合う店だった。引き戸を開けるとすぐに土間があり、一つ段差を越えて向こう側に畳の部屋がある。表に出ている？古川骨董店？の看板を見て入ってきた客は、その畳の部屋を見てしばし呆然とするのだ。その部屋は畳の上であろうと棚の上であろうと、所狭しと敷き詰められた、がらくたで一杯なのである。ちゃぶ台の上には飴色に輝く蓄音機が静かに座り、その隣には古ぼけた緑色のクッションが転がっている。誰かがばらまいた様にも見える色とりどりの折り紙に、折りかけの鶴。へこんだ紙風船。間抜けな顔の豚を模した蚊取り線香。ガラス張りの戸棚を挟んで仲良く並んだこけしが笑いかけてくる。天井に程近い戸棚の上には日本人形。細かい彫刻が施された鏡。うず高く積みあがった着物。そして、そんな物を見ていると部屋のさらに奥、色褪せた様な障子をがたがたといわせながら、藍色の着物を着た女性がひょっこり顔を出すのである。

「骨董店なんて、名ばかりですので」

＊

・・・

まゆちゃんさあ、さっさとかみかわかしちゃいなよ。――分かってるって、うるさいな。――うるさいって何、あたしはお母さんに言われたから仕方なくちゅういしてるだけなんだから。――何でもかんでもお母さんの言う事ほいほい聞いて、えらそうに注意すんな。――だれがえらそうなの、まゆちゃんはお姉ちゃんなんだからもっとちゃんとしてよ。――そっちこそ、妹なんだからえらそうな事言わないで大人しくしてなよねっ。――サイアク、まゆちゃんって本当にサイアク。――悪かったね、でもあんたに言われたくないんだけど。――まゆちゃんなんて大キライ。どっか行ってよ。――じゃあ鞠乃に良い事教えてあげる。――良いことってなあに。――お姉ちゃんギムキョウイクが終わったらすぐこの家出てくから。――えっ。――お母さんはお父さんとリコンしてるし、鞠乃がお母さんと2人で暮らせんだよ。良かったね。――お母さんは、リコンしたの。――そだよ。あんなの嘘に決まってるじゃん。お父さんは仕事が忙しいから仕事場を借りて寝泊まりしてるなんて。――うそ、うそ、うそだよ。まゆちゃんがうそついてるんだよ。――嘘じゃないって、リコントドケも見ちゃったしね。――まゆちゃんのうそつき。――あたしは絵の勉強をしに行くんだ。大キライなこの家とも鞠乃ともお母さんともおさらばってわけ。――そしたら、鞠乃はお母さんと2人になるっていうこと。――そだよ、よかったじゃん。

. . .

＊

古川骨董店。目印は、風雨にさらされ続け、ろくに手入れもされないまま放置されている看板。朱色のペンキで書かれた文字はほぼはげかけていて、文字の判別すら難しい。色褪せた引き戸が、寂しげに客を誘っている。お世辞にも繁盛しているとは言えない――戸を叩くのは、雨粒やら風やら、そんなものばかりなのだろう。それは遠野商店街の端の方に、ぽつんと所在なげに立っている。これでは店自体が骨董品の様だ。特に理由もなく、野良猫の様にぶらぶらしていて見つけた店――小さい頃から馴染みのあった商店街に知らない店があるのも不思議な話だと思ったけれど――これも何かの縁だと思うことにしよう。物好きな私の足は、軽快なリズムを刻みながら、引き戸の手前を目指した。引き戸の前で立ち止まり、中を覗き込もうとしたが、ガラスは不機嫌そうに曇ったままで、どんなに目をこらしても中の様子を伺う事は出来ない。そこで、さらに身をのりだして、今度は引き戸の上の小さなガラス窓から、と思い、爪先立って中を覗こうとする。我ながら悪趣味なものだと自覚し、微苦笑を漏らしたりしていると――

「わあっ」

凄まじい音をたてて、引き戸が開いた。私は慌てて爪先立ちをやめて元の姿勢に返り、恥ずかしさから反射的に下を向いた。目の前に立っている店主らしき人のサンダルが、コンクリートの上でざりっ、と音をたてた。何をしていたのかと問いただされるかと思い、俯いたままその人の言葉を待つ。これでは叱られている子供の様だ。が、頭上から降ってきた声は驚く程穏やかな調子で、こう言った。

「いや、せっかく来てもらったのに悪いね。この引き戸、開けるの

にちょっとコツがいるもんだから」

私が顔を上げると、そこに立っていたのは中年の男性だった。半端な感じ――というのは、髪は短くも長くもなく、来ているジャージは新しくも古くもない。おまけに、穏やかな光を湛えた目は、光の具合によってきらきらと輝いて、その目のせいか――私よりも若い人にも、随分年をとっている様にも見えた。私があまりまじまじと見ていた事に気がついて、ぱっと目をそらすと、その人は白い歯を見せ、ひひっ、と笑った。感じの良い笑い方だと思った。私が今まで見たことのある、どの笑い方とも違って、どの笑い方より感じの良い笑い方だと思った。

＊

店内。汚い、の一言で済ませられる。とにかくごちゃごちゃしていて、ぐちゃぐちゃしていて。どこで嗅いだのか覚えていなくても、何となく懐かしい香りがした。店主は、タワーの様にうず高く積み上げられたがらくたをかき分けて奥へと進んでいく。店主が通った後には、がらくたのタワーが仰け反って彼を通して、１本道が出来ていた。

「物だらけで危ないから注意してね」

まさかついて来いとでも言っているのだろうか。私が唖然としていると、店主はまた、歯と歯の間から息を漏らすみたいな、あの笑い方で笑った。私はよほど分かりやすい顔をしていたのだろうけど、店主はそれをさほど気にした様子もなく、何やらぺりぺりと小気味良い音をたてながら背中を丸めて何かしているらしい。黙って店主が何か言うのを待っていると、しゅんしゅんと聞き慣れた音がし始めた。やかんでお湯を沸かしているみたい。まさか、そんなところに台所があったなんて。それじゃあ、ぺりぺりという音はもしかしてカップラーメンの――。

「この3分っていうのが、面倒だよねぇ」

やっぱり。店主がカップ麺を作っている事を確認してしまうと、私の中で小さな何かが爆発した。この人、一人暮らしでしょ、人の気配なんてしないし。それに仮に奥さんがいたとしても――私は銀色のシンクを睨んだ。食べ終わったカップ麺の空ばかり。

「台所、貸してください」

「えっ？」

＊

「私はごみをまとめるので、こっちお願いします」
「えっ？」
「後、家から食材とか持ってきてご飯つくりますね」

店主は金魚の真似でもしている様に口をぱくぱくさせた。そのまま、ふらふらと私が指さしたがらくたの山を崩しだす。どうしてこんな事を言ってしまったのかは、自分でも分からなかった。感情を制御する機能を失ってしまったみたい。壊れたロボットの様にぎくしゃくとした動きで、黙々とがらくたを段ボール箱に詰め込む店主。それを見ながら、私もパーカーの袖をまくってごみを片付ける。私とこの人は、何の繋がりもない赤の他人で、きっとこの人は今日会ったばかりの人間にこんな風につきまとわれて迷惑に思っている事だろう。それでも、そんな素振りは一切見せない店主――の背中を見つめて、私はトートバッグからミネラルウォーターの入ったペットボトルを取り出した。きんと冷えた水が、ただ冷たい液体が、音をたてて喉を滑り落ちていくのが、ただ、ただ、気持ちが良かった。

＊

何時間かすると、土間は見違える程綺麗になった。隅の方に埋まっていたキッチンは磨かれ、そこここに建築されていたがらくたのタワーは跡形もなく消えている。畳の部屋はまだ手つかずだったけれど、棚と棚の間に押し込まれていたちゃぶ台を引っ張り出してきて、その上に皿を並べた。桜の花弁を散らした柄の皿には、アジの開きと大根おろし。その隣にはほうれん草を胡麻で和えたものと、きんぴらごぼうがそれぞれ小振りのお椀に納まっている。里芋の入った味噌汁に、おひつからよそったふっくらとしてつややかなご飯――その上には、ちょこんと焼きたらこがのっている。

「すごいね、どれも美味しそう」

「昨日の余り物なんかも混じってますけど、こんな物で良かったら」

「ねぇ、君、名前は」

しばらくの沈黙の後――というのは、店主が黙々とご飯を食べていたからである――ふと、思い出した様に聞かれた。案の定。案の定も何も、見ず知らずの他人にこんな風に世話を焼かれたら名前くらい聞くだろうけど。そこで、私は答えた。

「葛木鞠乃です」

「へぇ、ってことは麻由ちゃんの妹さんか」

これには驚いた。でも、そんなに驚く様な事でもなかったかもしれない。何しろこんな小さな町だ。――そういえば、小さい頃に出掛ける支度をしている姉を見て、友達と遊ぶのかと聞いても、ちょっと出掛けるだけ、としか言わなかった事が何度かあった――あの時

はもしかしたら、ここに来ていたのかもしれない。
よくここに来ていたんですか、姉は。と聞くと、しょっちゅう来ていたよ、来るたび学校の事やら家の事やら、そう、鞠乃ちゃんの話もしてたっけ。と返ってきた。さらに、

「ほら、1ヶ月前にあの子が発つ前ね、挨拶しに来たよ。
それから今まで便りなんかはないけどね、だってあの子そういう子だから」

と言った。姉が此処へ来て店主と会話しているところなんてどうやっても想像出来なかったけれど、この人は私なんかよりもずっと姉の事を分かっているのかもしれない。そう考えていると、わけもなく悲しくなってきた。本当に、何のわけもなく――姉をとられた様な気がしたわけでもない――鼻の奥がつんとするのを感じた。何となく手持無沙汰な気がしてきて、ミネラルウォーターのペットボトルを口へ運んだ。ペットボトルはすでに空で、自分でもそれを分かっていたけれど、そうせずにはいられなかった。店主は器用に箸を使ってきんぴらごぼうを食べているところで、私はそれを横目で見ながらミネラルウォーターを飲むふりをした。あまり強く握りしめていたせいで、ペットボトルが、べこん、と音をたててへこんだ――のと、底の方に溜まっていた水滴が、つーっと喉の奥の方に滑り落ちてくるのはほぼ同時だった。

「あの、古川さん」
「あ、僕、古川じゃなくて池内っての」
「えっ、でもこのお店」
「皆ハルさんって呼ぶけど、適当に呼んで」

何を言おうとして声を掛けたのか、もう分からなくなってしまった。ただ私に分かるのは、ハルさんという呼び名は彼にとてもしっくり

きていて良い感じで、私がハルさんの事をハルさんと呼ぶ事で、ハルさんの存在をハルさんたらしめて――ああ、やっぱりよく分からない。

＊

何を話せばいいのか分からなくなって、私はただじっとハルさんの手元を見つめる。ハルさんは食器をかちゃかちゃいわせながら、私が作った料理と向き合う。白熱灯はそれをぼんやりと照らす。白熱灯の光に閉じ込められてしまったみたいに、この部屋は薄明るく淡く、ぼんやりとじんわりと――――、

「就職、決まった？」

「えっ、あー、えーと」

ハルさんが独り言みたいに――殆ど疑問符もついていない様な――ぽつんと発した言葉。その言葉は、私の心にぽんと投げ込まれた。水溜まりに小石を投げ込むみたいに。そしてそれは、私の心にいくつもいくつも波紋を残す。私はしどろもどろにこう言った。

「ま、まだ、です」

「そっか」

咄嗟に吐こうとした嘘を飲みこんで、代わりに本当の事を吐きだした。唇を噛みながらハルさんの横顔をじっと見る。何か言わなくちゃいけない――でも、こんな時に限って喉元からは何の言葉も出てこない。就職の話なんて持ち出してきたのは、多分姉がその話をしたからだ。恨む、恨むよ、こんなところでこんな気まずい空気が流れているのはそのせいだ。と、自分勝手な憤りを覚えていると、突然、

「別に急がなくてもいいと思うよ」

ハルさんはそう言って、味噌汁を啜った。私はその言葉の意味を噛みしめる様に、心の中でハルさんが言った事をそっくりそのまま、ゆっくりと繰り返した。別に、急がなくても、いいと、思う、よ――。

＊

外に出ると、いつの間にか雨が降り出していた事に気付いた。甘い匂いの水滴が私の指先をしっとりと濡らす。ハルさんがご飯を食べ終わった後も、私達は当たり障りのない話をしてだらだらと過ごし、気付いた時には時計の針は1周していた。ハルさんは、慌てて身支度を始める私を特に引き留めもせず、また掃除とご飯よろしくと言って笑った。引き戸の向こうに足を踏み出すと、あっという間に別世界。透き通って丸い飴玉の中に閉じ込められてしまったみたいで、あるいは砂時計の底に立っているかんじで――上を見上げればとめどなく落ちてくる雨粒が砂の様で――とにかく、別世界。

「やーばい、傘持ってきてない」

そう呟いた時、小学生くらいの男の子達が長靴に合羽という格好で傘を振り回しながら駆けていく姿が目に入った。こうなれば私もダッシュで帰ろうか。商店街を抜けて暫く行くとコンビニがあるから、そこでビニール傘を買って――ああ、駄目だ、コンビニのある方と私の家がある方は真逆だ。どうしよう。私は足元のスニーカーからジーンズ、パーカーと自分の姿を下から眺めまわした。とりあえずスカートじゃなかったのは不幸中の幸いか。トートバッグを頭にのせて走るとか、いやそれもあまり良い案ではない。仕方がない、ハルさんに傘を借りてこようか――それもなぁ。そんな事を考えている内にも、時間はさらさらと流れていく。雨と一緒に。やっぱりダッシュで帰って家についたら即シャワーかな。と、ようやく覚悟を決めて右足を前に出した――右足は一瞬でびしょ濡れになった――時。

「これ使う？」

突然目の前が真っ赤になった。ところどころに白い斑点――差し出された物は、赤い唐傘で、白い斑点だと思ったものは破れ目から覗く空だった。

「な」

「な？」

「……何ですか…これっ……」

必死に笑いを堪えながら声を絞り出すと、ハルさんは真面目な顔で、唐傘だよ、と言ったものだから、もう堪え切れなくなって大声で笑ってしまった。お腹を抱えて笑っていると、ぽかんとしていたハルさんもつられて笑いだした。片方だけ屋根の外でぐっしょりと濡れているスニーカーも、こんな時に見るとひどく面白い物に思える。私達が笑っているその間、雨はしとしとと降り続いていた。

＊

右にも屋台、左にも屋台。行き交う人々。こつこつ貯めていた貯金箱一杯の百円玉とひきかえに、幸せを買う。安っぽいプラスチックのコップに細かく砕いた氷ばかりが詰めこまれているオレンジジュース――ストローの先で氷をかき出して食べた。イチゴ味のカキ氷は見た目こそ？大盛り？だけれど中は思いっきり空洞。それから、綿菓子にヨーヨーに焼きそば、林檎飴、そんなものたちを端から買いしめていく。買う価値のあるものもないものも、一緒くたにして。浴衣の柄は金魚。赤に白に金色に、金魚たちは跳ねまわる――、

「はい、おまけでもう１匹どうぞ」

＊

・・・

ねーねー、行かないの、夏祭り。――行かないけど、なんで。――えー、行かないのー、友達とかと行けばいいじゃん。――誘われたけど、断ったの。――なんで。――さっきからなんでなんでってうるさいよ。なんでもいいでしょ、あんたには関係ないんだから。――えー、最近いっつも金魚の絵ばっかり描いてるじゃん。金魚、見ながら描いたほうがいいんじゃないの。――別にいいってば。――じゃああたしがとってきてあげようか。ね、欲しいんでしょ。とってきてあげるよ、金魚すくいあるだろうしね。――ちょっと、何よ、急に。あたしは別にいいって言ってるじゃん。――よし、じゃああたしが金魚とってきてあげる。――ちょっと、鞠乃、どういうつもりよ、いいってば。いらないってば。――なんでよ、せっかくとってきてあげるって言ってるんだからさー、そんな引きとめることないんじゃないの。――だって頼んでもないのに、おせっかいなんだから。――失礼な。あたし、とってくるから、待っててねー。――あ、ちょっと、鞠乃。――行ってきまーす。

・・・

＊

「お母さんお母さん」
「なあに、どうしたの」

誰かいる。誰かが何か言っている。それは、最初は靄の様にあやふやなものだったけれど、時間が経つにつれてだんだんとその姿があきらかになっていく。見覚えのあるショートカット――麻由ちゃん。麻由ちゃんはその幼さの残る顔を無邪気に歪めて、声高く笑う。お母さん――クセのあるセミロングを素っ気ない黒のゴムでまとめている――に抱きついて、楽しげに。何だかむかむかしてくる。私の頭の中はマグマみたいに熱くなり、ごうごうと煮え立ち始めた。有り得ない。2人共どうしちゃったの。麻由ちゃんは、間違ってもお母さんに抱きついたりしない。あんな風に、心底楽しいって顔で、笑ったりしない。今度は吐き気がしてきた――唇を噛んで必死にこらえる。頭が割れそうに痛い。胃液の酸っぱい味が喉元までこみあげてきて、もう我慢出来そうにないと思った、その瞬間。突然お母さんと麻由ちゃんの姿がぐにゃりと歪んで、絵の具を水に溶かした時の様にゆらゆらと揺れ始めた。――気がつくと、私は麻由ちゃんの隣に座って西瓜を食べていた。空全体を覆ってしまおうと決めてしまったみたいな入道雲の下。俯くと、白い手が目に入る――小さい、幼い手。これは夢か。どうやったら覚めるんだろう。夢の麻由ちゃんは、黙って何も言わずに西瓜にかぶりついた。私も真似して西瓜にかぶりつくと、甘い果汁が口の中いっぱいに広がった。きんと冷えた西瓜はとても美味しくて、私は何だか夢見心地に――あっ、これ夢だったっけ。変な夢。私は頬を軽く叩いてみた。軽い音と一緒に、軽い痛みがやって来る――覚めない。もう1度。もう1度。もう1度――――覚めない。１０回目くらいだろうか、さらに手を振り上げて頬を叩こうとすると、隣の麻由ちゃんはいつの間にか立

ちあがっていて、手には西瓜もない。――何かがおかしい――麻由ちゃん、大人だ。さっきまで小さい頃の麻由ちゃんだったのに、もう大人だ。私がまじまじと見ていると、麻由ちゃんは口を開いた。

「金魚」

「えっ」

「あんたが餌やらなかったから死んじゃったよ」

慌てて振り向くと、私の真後ろに金魚鉢があった。恐る恐る覗きこむ――、

＊

そこで不意に目が覚めた。寝すぎなのか頭はやけに重く、内側からずきずきと嫌な痛みが襲ってくる。重い頭を振って、周りを見回す――見慣れた天井、見慣れた壁紙、見慣れた、狭いアパートの狭い部屋――。改めて観察すると、驚く程窮屈な部屋だ。元々の狭さに加えて、物が多いため余計に圧迫感を感じる。

「んー」

軽く伸びをして立ち上がり、とりあえず何か飲もうと冷蔵庫を開け、ミネラルウォーターを取り出す。水で潤した喉がぴくりと震え、同時に圧し掛かる様な頭痛で忘れていた夢の事を思い出した。忘れていたというより、一時的に思考の外に追いやっていただけなのだろうが。――麻由ちゃん。急に、西瓜の味を舌先に思い出して気持ち悪くなった。ごくり、と音をたてながら唾を飲み込む。どうして今頃、姉の夢など見たのだろう。1ヶ月前にふらりと家を出ていって、どうしているのだろう。いつ帰ってくるのだろうか。それとも、もう帰ってこないのだろうか。1つ挙げればきりがない自問を繰り返すのにかなりの時間を費やしたが、その内に奇妙な夢の余韻を伴った頭痛は治まった。外ではまだ雨が降っているらしい。屋根を伝い、窓ガラスを伝い、流れ落ちていく雨の音は耳に心地よい。びしょ濡れのまま玄関に脱ぎ捨てたスニーカーを乾かすため、私は玄関へと向かった。

＊

何となく電源をいれたテレビはただわんわんと騒音を響かせるだけで、その事は私をとても苛々させた。たったそれだけの事で苛々するなんて、馬鹿げているしくだらない、と分かっていてもそう簡単に割り切れるものではなく、むしろ馬鹿げているしくだらない、と理解してしまった事で、いっそう苛々はつのっていった。先程の頭痛ととってかわったこの苛々は、どうも頭痛以上に私と相性が悪いらしい。自分とは関係ない、どこか遠いところで起こっている事の様に思える――気持ちを落ち着かせるために読んでみた本も、始めてみた掃除も。――いや、それは違う。後ろに、かもしれない、はつかない。違う、のだ。私が信じられないのは数時間前の骨董店での出来事だ。馬鹿みたい。ハルさんと出会った事だって、雨の中を帰ってきた事だって、全部本当の事なのに。でも、自分の身に起こった事を信じられなくなるくらい、骨董店での出来事はどこか浮世離れしていて、どうやっても自分という厄介な生き物を納得させる事は出来そうになかった。それでも私は、頭の隅でハルさんの事を考えようとする。それから、麻由ちゃんの事も。つけっぱなしのテレビ――音楽番組が始まったらしく、女性アーティストの力強い声が耳殻を刺激する。失恋した女性の心情を歌ったその曲は、今の私の心境とはあまりにもかけ離れすぎていた。

＊

こんな時に限って冷蔵庫は空っぽで、考え事はひとまず床に捨ておいて買い物に出かけなければいけなくなる。狭い部屋を後にしてアパートの階段を下りると、空はすでに赤く染まっている――が、夜の色が夕焼けに染み込むのはもうしばらく先の様だ。かあかあと鳴き騒ぐカラスたちを横目に、近所のスーパーマーケットへの道をたどる。私はそう騒がしくもないけれど静まりかえっているわけでもない、半端と言ってしまえばそれまでなのだが、この時間が好きだった。そんな私の気持ちを反映してか、スニーカーは舗装された道をリズムよく跳ねる。わずかばかりの砂埃がたっては、独特の匂いが鼻腔を刺激する。隣を通り過ぎていく小学生は何人に達しただろうか、スーパーについた頃にはまた少し、空の色は変化を見せていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6346q/

金魚の声、

2011年4月16日07時11分発行